リービ英雄「天安門」における台湾の家
――幸福な原風景を求めて

張　雅婷

1.　はじめに

リービ英雄（1950 年～）はユダヤ系アメリカ人で、父の仕事のため 6 歳から 10 歳までを台湾で過ごした。その後、両親の離婚でしばらく母と重度の知的障害を持つ弟と共に香港に滞在した後、12 歳の時にアメリカに戻った。一方、父は台湾で知り合った上海出身の中国人女性と再婚し、後に横浜にあるアメリカ領事館に転任した。[1]彼は 1967 年に高校を卒業後、日本に一年間滞在しているが、その間、父との対立が深まり、新宿などへの家出を繰り返した。その経験が後のデビュー作となった『星条旗の聞こえない部屋』（講談社、1992 年）の創作にも繋がった。この小説は野間文芸新人賞を獲得し、これを機に西洋出身の日本語作家として一挙に注目を集める。

1993 年に初めて北京を訪ねた。その体験は、リービに多大な影響を与え、後の「天安門」（『群像』1996 年 1 月号初出、『天安門』（講談社、1996 年）に所収）の創作に強く関わっている。彼は自伝的日本語論の『我的日本語』（筑摩選書、2010 年）で、プルーストの『失われた時を求めて』ではマドレーヌの味によって子供時代に引き戻されることを例に挙げ、自ら北京で受けた衝撃について、「初めて北京の地に立ち、大陸の言葉が聞こえてきたとき、その音によって、三十年ぶりに台湾での記憶が呼び覚まされた。（中略）このとき、四十代の大人が、七、八歳の子どもに、時間的に戻る。戻って、その家族が崩壊するのをふたたび体験する」[2]と述べている。そして、この極めて私小説的な内容を日本語で「天安門」に書いた。

本稿で扱う「天安門」は、現代中国での見聞を記しながら台湾の記憶を回想的に書き綴ったものである。前作の『星条旗の聞こえない部屋』で最小限にしか語られなかった台湾での生活が、ここでより詳細

に掘り起こされることになる。しかも、リービが「天安門」で初めて子供時代の台湾にあった家を「自分の家」と言い出すことは注目に値する。これは後の台湾での記憶を描いた作品の基調となるものである。例えば、『国民のうた』（講談社、1998 年）や『ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行』（講談社、2002 年）などの小説のほか、随筆や対談なども数多くある。

なぜリービが台湾の家について繰り返し描くのかという問いについて、笹沼（2011）は「天安門」を含む作品全体を捉えて、台湾の家はリービにとっての移動や越境の原体験を象徴する場であると同時に、中国と中国語に対する視線の原点ともなっていると指摘した。[3]しかし、台湾の家を単に「他者に囲まれた空間」や「主体性を突き放す」場所とする笹沼の論だけでは、リービが子供時代の台湾に抱く感情的な側面を見落としかねない。なぜ彼自身が台湾の家を振り返る時に、しばしば「幸せ」だったことを語るのかは興味深いし、更に、台湾の家を囲む塀の内と外ではそれぞれ違った記憶が形成されていることも看過できない。

「天安門」は日本語を母語としない外国人の小説として初めて芥川賞の候補に入選したことで脚光を浴びた。しかし、芥川賞選評を含む多くの評論[4]は、作中に日本語と英語と中国語を織り込んだ多言語の使用に焦点を当てたが、台湾での記憶そのものに関してはあまり注目することはなかった。また、選評の中で、宮本輝が「天安門」について「長い小説の一部という印象がつきまとい、<大陸>と<毛沢東>に向ける主人公の視線が理解できなかった」[5]と評しているが、この点は後に検討するように、アジア近現代史と主人公の辿った私的体験を照らし合わせて考察することで理解が可能になると思う。

本稿ではまず、「天安門」を貫く軸としての「毛沢東」の存在を浮き彫りにする。主人公の台湾体験が如何に「毛沢東」に左右されるかは、中国に押し出された国民党老将軍と中国人女性グエ・ランを通してみることができる。「かれ」の一家は国民党を手伝うために台湾に来たが、グエ・ランの出現による家族崩壊のため、母と共に台湾を去ることになる。

次に、その間に住んでいた台湾の家で聞き慣れた老将軍たちの北京

語と用人ラオ・シエの存在、また、日本式家屋の塀内の家族生活と塀外の風景を検討する。そうすることで、リービが台湾で体験した家族崩壊が彼にとって人生の根源的な分岐点でありながらも、同時に台湾の家を幸福な原風景として位置づけていることを明らかにできると思う。

2.　「毛沢東」の存在

なぜ主人公「かれ」の一家が台湾に来たのか、また「かれ」がなぜ台湾を去ったのか、それは当時の歴史的背景と強く関わっている。本節ではまず本作品の一つの軸と看做すことができる毛沢東の存在を明らかにし、時代の流れを追って、毛沢東に対するそれぞれ異なる呼び名「Mao」「毛主席」「マオ」に応じて、主人公の辿った私的時間を見てみたい。

小説の冒頭、中年になった「かれ」が日本から中国行きの飛行機に乗っているところでは、窓外の雲が「毛主席」の横顔に見えたり、頭の中で 60 年代にアメリカの大学の中国語授業で暗記した中国の歌「**东**方**红**，太阳升，中国出了个毛**泽东**！」[6]が繰り返し思い出されたりしている。「毛主席」という呼び名は、「かれ」が台湾を去った後の毛沢東時代に、アメリカの大学で、幼時に聞き慣れた中国語を勉強し続けた時に学んだものである。子供時代に台湾で植え付けられた狂人やバケモノの形象が一転して、60 年代になって人々に尊敬される人物となった。ここでは大学の授業で教えられた中国語が、「かれ」の台湾での記憶を触発しなかったことに注意しておきたい。北京語の響きによって無意志的記憶として呼び返される台湾体験は、「かれ」が 90 年代に初めて北京に訪ねるまで待たなければならない。また、スチュワーデスである大陸の女性を見て、台湾の家にあった父の書斎に飾った絵を思い浮べる。そして、毛沢東の呼び名を「毛主席」から「Mao」に遡らせ、「父がただ「Mao」と軽蔑な口調で呼び捨てにしていた」(「天安門」、12。以下の引用は頁数のみ記す）子供時代を思い出す。

「かれ」は父の外交官の仕事のため 1956 年に台湾に移り住んだ。「かれ」の家に出入りする老将軍たちや、後に継母となった中国人女性は 1949 年に国民党と共に台湾に移らざるを得なかった人たちであった。

この人たちの移動は冷戦という背景を抜きにしては語れない。戦後、日本による半世紀にわたる植民地統治が終った台湾には、間もなく1949年に共産党に敗北した蒋介石率いる国民党軍隊とその家族が撤退してきた。1950年代に入ると、米ソ対立を皮切りにアジア全体が冷戦体制に巻き込まれた。その国民党政府にとって、共産党の砲撃による「台湾海峡危機」[7]に対処する軍事力確保と経済復興などの面で、アメリカからの支援・援助は必要不可欠であった。1954年12月にアメリカとの間に米華相互防衛条約[8]を調印したことで、双方の協力関係はより一層固くなった。こうした歴史の波に流されて、登場する主人公一家を含む多くの人たちが台湾に合流してきたのである。

「かれ」は5歳から10歳の誕生日直前までの間、父と母とかれの弟、一人の用人と共に、旧植民者の日本人が残した、高い塀に囲まれた庭付きの木造家屋に住んでいた。幼時、母親から「世の中には国民党と共産党というのがあって、わたしたちは国民党を助けに、ここにきている」（17）と聞いた。そして初めて大陸が共産党によって「占領」されているという話を知る。

> 高い壁の外に広がる全世界が国民党と共産党とに分けられている、とかれは思った。そして共産党という奇妙で、母の声の調子からして暗闇をほのめかしている言葉が、大陸のミステリーをさらに深める結果となった。（中略）大陸は、もちろん、誰も行けるとは思いもよらないところだった。大陸は行けないから大陸だった。その真実は小学生のかれにもなんとなく分かっていたのである。（18）

この50年代に幼い「かれ」が頭に焼き付けられた冷戦の残影、更に戦後の長い間に維持されてきた冷戦体制の影響を考えると、90年代になっても中国行きの飛行機に乗る時に、「普通でノーマルで常識的な飛行機が、大陸へ行く。そのことがかれには理不尽な感じがした」（11）という「かれ」の心情は容易に理解できるだろう。

幼いころ父に連れられて行った映画館では、「この国」の国歌の「三民主義」の放送が終わったスクリーン上に、輝いている島と、その島

の百倍もある暗闇の大陸が現れたし（19）、外交官の父が度々家に来る国民党の老将軍たちと北京語で談笑したり、「光復大陸」（大陸を回復せよ）という音頭を上げたりすることにも「かれ」はよく耳を傾けていた。このように、当時の台湾における国民党と大陸の共産党との間の冷戦の緊張感が「かれ」の日常生活の中まで浸透していたことが分かる。

ある日の夕食時、父が共産党による連日の砲撃に触れて「大陸からの侵入」の話題を持ち出す。母から「What's going to happen?」と質問を受け、父は「I don't know. Mao is Crazy」（28）と答える。それは「かれ」が初めて「マオ」という名前を耳にした時であった。その夜、「かれ」は「asleep のまぎわに現れた大陸が、いつもより厖大で、漆黒の暗闇に包まれていた。その大陸には一人の住人がいた。その大陸にはマオという狂人が出没するようになった。（中略）「この国」にいつ襲ってくるか分からない」（29）バケモノを想像した。「かれ」の中に、国民党と共産党、島と大陸、輝きと暗闇という二元対立の世界が形成され、暗闇とミステリーの大陸の上に居る狂人でありバケモノとしての「マオ」に対する恐怖感が生まれる。

ここで興味深いのは、グエ・ランが家に現れ始めた場面の後に、直ぐ「大陸からの侵入」の話題に移るという巧みな構成が見られることである。それまでの国民党と共産党が対峙した状態から、毛沢東がいつ襲ってくるか分からないという恐れがあるという状態への変化が観察できる。ここにおいて、「マオ」とグエ・ランの形象が微妙に重なり合うことが読み取れる。同時に、グエ・ランの出現に対する不安も示唆されている。

そして 90 年代に「かれ」が毛主席紀念堂に保存された毛沢東遺像を観覧するところで、幼少期の台湾で父が呼び捨てにしていた「Mao」を、自分が身に付けた日本語の「マオ」に替えて叫ぶ。しかもそれは、「海峡の向こうまで届くほどの、大きな声が、部屋の中で鳴り響いた」（67）のであった。これは、前の浜辺での場面、9 歳の「かれ」がジープにいる父とミス・ジャオを離れて盲目的に走りつづけた後、鉄条網のすぐ側に「巨大な太陽に遮られ、その裏には大陸があった。マオがいた。（中略）目をつむると、大陸の暗闇が押し流されるように海を

覆い、浜辺ごと島を呑み込んだ」（35）という場面を思い起こさせる。このように、毛主席紀念堂で叫び出した場面が、幼少期に共産党や「Mao」に対して抱え込んだ恐怖感と重なっていることが分かる。

その「Mao」という呼び名は、後に「かれ」がアメリカの大学で毛沢東時代の中国語を学んだ時に「毛主席」に変わり、さらに日本に常住する中で日本語のカタカナ表記の「マオ」に切り替えて記憶される。この毛沢東をめぐる「Mao」「毛主席」「マオ」等の異なる呼び名が仄めかすのは、主人公の越境軌跡―幼少期の台湾、青年期のアメリカ、中年期の日本―でもある。戦後の毛沢東に付き纏うアジア近現代史に沿いながら「かれ」の越境軌跡が如実に語られていると考えることができる。

3.　グエ・ランの出現

本節では、前節に論じた毛沢東の存在を踏まえて、「かれ」の家族に介入する中国人女性グエ・ランの出現が如何にその歴史に関係づけられて展開されているのかを検討する。ここに登場する、父がグエ・ランと呼んでいた中国人女性は、前作の『星条旗の聞こえない部屋』[9]において台湾海峡の浜辺で父とデートする女性、後に領事夫人となる中国人継母の「貴蘭」と同一視することができる。前作ではただ漢字で表記された「貴蘭」は、「天安門」になって中国語の響きで記憶されたグエ・ランとなり、更に彼女が初めて「かれ」の家に現れた時に遡って描写されている。

ある日、書斎から聞こえる父の中国語に引かれて、「かれ」が中を覗いてみると、父の椅子を「黒髪の、かれよりは十いくつか年上の、そして父よりは十いくつか年下のすらりとした女が占め」（23）ていた。「Where are you from?」という「かれ」の質問に対して、女は自然に滑らかな英語で「Oh...from the mainland, originally」と答えた。父から「This is Miss Jiao」と紹介されて、「大陸が「占領」された後に、高校生だった彼女が、家族と一緒にここに渡ってきた」（26）と知らされる。「かれ」は途中に 2 回も「お母さんはどこにいるのか」（24、25）と考えている。

> 三十年の歳月が流れても、ミス・ジャオが父の書斎をひんぱんに訪れるようになった頃のことを、かれは忘れていなかった。家の中の畳部屋と洋間、廊下の黒い板、壁の天辺に並ぶガラスの破片をきらめかせながら庭に注ぎ込む日差し、門を一歩外へ出れば耳を打つ子供たちの笑い声。（27）

ここで注目すべきは、忘却しがたい記憶として、父の秘書であるミス・ジャオの出現のみならず、外の子供の笑い声と旧日本人家屋の空間も同時に描かれていることである。

そして 90 年代になって、「かれ」は一人で初めて中国を訪れる。北京に着いた当日の夜、ホテルに泊まったその一晩で、繰り返し家族の崩壊に言及している。テレビ画面に映った大家族の団欒を見て「我是龍的伝人」という南方の歌声が流れる中、画面の裏から自分のことをあざ笑っている声が聞こえる気がし、「俺の家族はこんなんじゃなかった」とつぶやいたり（51）、ベッドの中で過去の記憶を振り返ったりもしてもいる。

> 島の家と、大陸を想像しながら寝室から眺めていた夜の広々とした庭を思い出した。少年時代に純金色の髪だった母と、青年時代に継母となった黒髪の女の、二つの姿が交互に浮かんだ。（52）

また翌朝ホテルの窓から外を見渡し、「眺めている部屋の中には、中国人の継母がいた」（54）という。「かれ」の初めての北京体験においては中国人継母の姿が何回も現れる。さらに、これを毛沢東と関係づけて、「かれ」は実際に天安門広場に掲げた毛主席肖像を見て、「まるでかれの家族を破壊するためであるかのように、黒髪の女を大陸から追放した」（52）と記している。逆に言えば、これは毛沢東がその女を大陸から追放しなければ、この三十年間に辿ってきた紆余曲折の人生を送らずに済んだということを意味していると言える。このように、家族崩壊が「かれ」にとっては避けては通れない人生の転換点であったことが考えられる。

以上見てきたように、主人公が大陸と毛沢東に向ける視線には、天

安門から見ていた現代の中国大陸のみならず、二重的な意味を持つ台湾体験も裏付られているのである。それは、一つは幼時に聞かされた毛沢東の脅威や大陸からの侵入といった言説に囲まれたことに形成された恐怖感であり、もう一つは、1949 年に毛沢東に大陸から追放された中国人女性が「かれ」の家族を分解させたという事実である。しかしながら、台湾は家族崩壊を体験した場所でありながらも、幸福な原風景として懐かしむ対象ともなり得ている。それは何故か、以下で検討したい。

4.　幸福な原風景を求めて

リービは「天安門」において、家族崩壊を描きながらも、同時に主人公が北京で呼び返す記憶の中にある台湾の家を「自分の家」(29) と位置づけ、「少年時代の輝かしい記憶」(59) だというパラドックス的な側面も見られる。ところが、そこで回想されるのは一家団欒のような親密な家族関係ではない。家族崩壊前の父母の関係を示した、「ちょうどその頃、父と母が一日に一回だけ顔を合わせる夕食」(27) や「父と母が両端から遠く向き合っている細長い食卓」(28)、「最初の頃にはまだ一緒だった父と母の寝室」(28) 等の記述が見られる。後の「国民のうた」(初出『群像』1997 年 11 月号、『国民のうた』(講談社、1998 年) に所収) では、重度知能障害である下の子の世話に疲れ果てた母と、その子を恥と感じる父が別室で寝ることにも触れている。

それでは、リービが多くの随筆や小説の随所に見られるように、台湾の家を「自分の家」として懐かしむのはなぜであろうか。それは例えば、用人ラオ・シエに遊んでもらったり、午後の日差しの中で庭の池で遊んだりするという当時の幸福だった時のこともまた思い出されるからである。台湾を去った後のアメリカでの貧困母子家庭の生活や 17 歳の時の日本での父とその新しい家族との暮らしに比べ、台湾の広い木造家屋で両親が離婚する前の生活は健全であった。更に、1993 年に初めて北京の旅で呼び返された記憶によって、もう一つの言葉の響きに囲まれることを事後的に幸福だと思うようになる。リービは実際に現代の中国を訪ねる中で、幼時に身に付けた国民党老将軍の北京語を使い続けている。本節では、「天安門」で構築された台湾での記憶を

分析し、特にそれ以降の作品にも共通して見られる北京語の響きと日本的居住空間の描写に着目する。

4.1　北京語の響き

リービは「天安門」の前 1993 年、北京からの帰国後直ぐに雑誌にノンフィクションの「北京越境記」を発表した。そして幼少期の台湾を振り返った時のことを以下のように記した。

> ぼくの子供の時代はしあわせだった、と青年になってから考えた。中国と何の付き合いもないまわりの米軍の将校たちと違って、わが家にはたびたび中国人の客を父が招待した。（中略）ぼくが子供のとき、家の中できいていた中国語は、清らかで「r」の音が豊かな北京語が多かった。[10]

ここから、父が中国人との交流の際使用していた北京語の響きが、子供時代に幸福を感じた一因となっていることが考えられる。

しかし、なぜ青年になってからこう考えたのか。その答えはリービが作家として最初に書いた二篇の小説、「星条旗の聞こえない部屋」と「ノベンバー」に見ることができる。デビュー作でもある前者は、白人青年で 17 歳の主人公ベン・アイザックが横浜領事館で父との対立が深まり、また、新しい家族に馴染めないため、新宿に家出した物語である。続編としての後者は、両親の離婚後、13 歳のベンのアメリカでの母子家庭の生活、白人貧困層の居住区での暮らし、そして神経症の発作を繰り返す母を描いたものである。このように、作者自身を模した主人公が台湾を去ってから辿った道は、必ずしも幸福だとは言えない。それを考えると、青年になってから台湾に向けられた感情に変化が見られることは不思議ではないであろう。

「天安門」の冒頭、中国行きの飛行機内で「かれ」は、「敗軍の島の地方都市で、三十年前のかれの耳を満たした、大陸を失った将軍たちの大陸の言葉が、切れ切れに甦った」（14）といっている。その、記憶に内蔵された「音」から「かれ」は台湾での記憶を回想しており、作品の中で、用人ラオ・シエや老将軍たち、またグエ・ランを、その音

を振り仮名にした中国語で表記している。また、実際に北京を歩き回る際の描写に多くの中国語の語彙や短文が差し入れられていることから分かるように、飛行機から降りリムジンバスに乗った時には、「かれ」は三十年前の北京語を思い出しながら使いはじめている。そしてその場所で中年男から返された言葉に「かれの記憶の底から湧き上がり、聞き覚えがあるというような親しみを感じた」（37）のである。「かれ」の記憶が後述する日本の居住空間という静物画的なものだけではなく、言語にも及んでいることが分かる。

リービは更に、随筆「久しぶりの北京語」の中で、幼少期に毎日耳にしていた北京語について、また北京でその言葉の響きにより甦った記憶について以下のように述べている。

> 特に、この場合、母国語ではなかったのに母国語のように抵抗なく子供の自己形成に大きな役割をはたして、思春期を直前にしてとつぜん途絶てしまった言語に、久しぶりに触れてみると、（中略）それが導いてくるもう一つの感性にはぼくがかなりの衝撃を受けた。[11]

このように、彼の台湾での記憶に言及する上で、北京語の要素に配慮しなければならないと考えられる。

4.2　日本的居住空間

「天安門」は、初めて家の所在と国の所属の不一致に触れた作品である。「かれ」は自国としての「アメリカ」についてはおぼろげな記憶しかなく、その前にむしろ、門の外に屯するぼろぼろの服の子供たちに、笑いながら「美国人」（メイグオレン＝アメリカ人）と中国語で呼ばれた幼いころの記憶が強くあった。そして、父母の談話の中に度々出てくる「ワシントン」には何の実感もわかなかった（28）のに対し、台湾については自分たちの異質性に気付きながらも、「どうも自分の国ではないようだが、自分の家が確実にある」（29）ように感じはじめている。ここで初めて使われる「自分の家」という単語は「天安門」と同年内に発表した小説「満州エクスプレス」（初出『群像』1996 年 11

月号、『国民のうた』に収録）ではより一層強まって何回も繰り返されることになる。

ここでは、その家を囲んだガラス破片を嵌めた高い塀を境界として表された家の中の生活と塀外の風景の対比も視野に入れて検討し、居住空間を明確にしたい。まず、塀外の風景を見てみたい。上に述べた門の外で中国語を話す子供たちの他に、もう一つ、台湾語を操る本省人[12]の少年たちも描かれている。「かれ」はジープ内での父とミス・ジャオの囁きに堪えられず、海峡の近くにある村落に向かって走り出し助けを求めようとしたが、その時、二、三人の本省人の少年たちが出てきて、一斉にあざ笑い、台湾語で「外国人！美国人！」（ワゴーラン！ビーゴーラン！）[13]と叫びだす。さらに、「かれが身を引いた瞬間、足のすぐ近くに小石が飛んできた。土くれが膝に当たり、柔らかく砕けてしまった」（34）という場面もある。

ここから、アメリカ人の「かれ」と本省人の少年たちとの間に介在する分断が伺える。「かれ」自身がその異質性のため、塀外の世界においては常に排除される危機に晒されていることが分かる。塀外の中国語を操る子供たちの彼に対する笑い声や、浜辺で本省人の少年たちに小石に投げられた体験から、台湾の家の塀外での記憶は必ずしも懐かしむものではないことが分かる。むしろ、この塀外の世界との隔たりが返って幼い主人公を塀内の生活に逃げ込むように働きかけていると考えられる

それでは、台湾の家は如何に幸福な原風景として記憶されてきたのか。「かれ」が住んでいた家は「日本人作的」（日本人が作った）木造家屋である。そこにガラス破片を嵌めた高い塀、ブドウのつるとキンカンの木を植えた広々とした庭、畳、書斎、洋間、廊下などがある。これは、上述したグエ・ランの出現と同様、「かれ」が三十年間経ってからも忘れがたいものとして記憶されている空間である。父の書斎にあった、日本人がこの家を慌てて引き払ったときに残していったという古い書物（22）については、「星条旗の聞こえない部屋」にも既に取り上げられている。それは主人公ベンが横浜と新宿で懸命に日本語を身に付けようとする際の描写の中で登場し、巧妙に自らと幼時に住んでいた日本的空間と結び付けている。

また、その居住空間の記憶を構成する際に、用人ラオ・シエも重要な存在である。ラオ・シエは「料理をつくり、家の掃除をして、そして子供のかれをよく肩に乗せたり抱え上げたりして、庭の中で遊んでくれた、父と同じ年くらい」（16）の人物である。これら木造家屋と用人ラオ・シエは「天安門」から後の作品において、台湾体験を触れる際に必ず言及されるものである。このように、言語と空間の記憶により構築された台湾の家は、高い塀に囲まれた内側の居住空間での生活に限られていることが分かる。

続いて、リービの二篇の随筆「台湾の家」と「イーリャ・ファルモーザー―四十三年ぶりの台湾」を傍証として挙げたい。そうすることで、台湾での記憶が彼自身とその作品にとって特別な意味を持つことが改めて確認できると思う。「台湾の家」に以下のような描写がある。

> ぼくの家がぼくの「国」ではないところにあったというだけのズレではない。（中略）実に不思議な「島国」に、そのいずれの国家にも所属しなかった家族の、ぼくの家があったのである。（中略）「アイデンティティ」など、そんな分別もなく、ただよく考えると相矛盾するいくつかの、しかし一つ一つがとても豊かな歴史の神話の中で、ぼくは幸せに育った。[14]

また、彼は2005年末、津島佑子が率いる「日台作家キャラバン」に参加し、43年ぶりに台湾を訪れているが、その描写にもそれを再び確認することができる。

> その島は自分の国ではない、とそこを離れてからよくわかった。しかし、自分の家はどこにあるのか、あるいはどこにあったのか、と聞かれたら、その島だ、と答えてしまう。[15]

さらに、台湾で行われた座談会についても、「台湾体験、自分の国ではなかった国にあった家の中の原体験を断片的な記憶として」[16]小説を書いている。上に引用した随筆の内容や座談会の発言からはリービ自身の台湾の家に対する心情をリアルに捉えることができる。

5.　おわりに

「天安門」は、リービが 90 年代に初めて中国へ行ったことで呼び返された台湾の家をめぐる記憶を描いたものである。1950 年代の毛沢東の歴史を背景に、「かれ」の家族が国民党を手伝うために台湾に来たが、大陸から逃亡してきた中国人女性のため生活は破壊された。しかし、本書に見られる、家族が崩壊する前の「幸せだった」台湾での生活については今まで触れられることがなかった。本稿を通じて、「かれ」にとっての幸福な原風景である「自分の家」は、両親が離婚する前に北京語の響きと日本的居住空間による構築した台湾の家に凝縮されたものであることが分かった。そして、それは失われた後、青年になって振り返る際のノスタルジーの対象ともなったのである。

注

1　リービ英雄「年譜」『星条旗の聞こえない部屋』（講談社文芸文庫、2004 年）を参照。

2　リービ英雄『我的日本語』（筑摩選書、2010 年）、128-129 頁。

3　笹沼俊暁「リービ英雄における「台湾」」（『文学研究論集』第 29 号、2011 年 2 月 28 日）を参照。

4　第 115 回芥川賞発表「芥川賞選評」『文藝春秋』1996 年 9 月号、431-437 頁。例えば、日野啓三が「作者の交ぜ織り的な文章表現と構成の豊かな新鮮さ」を評価し、大庭みな子が「数カ国語のひびきが音楽のように共鳴し合う面白さがある」と称賛する一方、田久保英夫は「中国語、英語、日本語とさまざまにくり返され、かえってイメージが抽象的に錯綜して、訴求力を弱めている」と評しているように、多言語の使用に言及するものが多い。また田久保英夫、江藤淳、富岡幸一郎による「創作合評」（『群像』1996 年 2 月号）では、江藤が「言葉の重層性によって自分のアイデンティティの重層性を提示する」と述べ、ここでも言語が注目されている。その他に、青柳悦子「複数性と文学――移植型＜境界児＞リービ英雄と水村美苗にみる文学の渇望」（『言語文化論集』第 56 号、2001 年 3 月 28 日）や、永岡杜人「言語について―リービ英雄論」（『群像』2009 年 6 月号）においても多言語が着目されている。

5　「芥川賞選評」（「文藝春秋」1996 年 9 月号）にある宮本輝の選評。433 頁。

6　これは毛沢東時代の中国の歌「**东**方**红**」の歌詞だが、「天安門」のなかにはリービが自ら訳したものがある。日本語訳「東方は紅、太陽が昇った。」（7）「中国が一人の毛沢東を生みだした！」（53）。英訳「The east is

red, the sun has risen.」「China has produced a Mao Zedong!」(8)。

7 台湾海峡危機とは 1950 年代に二回にわたり中国大陸と台湾間の軍事的緊張が高まった事件のことである。第一次台湾海峡危機(1954-1955 年)は中国人民解放軍による金門と江山島に対する砲撃であり、台湾は江山島を失った。また、付近の大陳島の防衛も困難となり、最終的に浙江省の拠点を放棄することで事態は収束を迎えた。第二次台湾海峡危機(1958 年)は中国人民解放軍による台湾の金門と馬祖に対する砲撃のことで、最終的に中国が「人道的配慮」から金門・馬祖島の封鎖を解除することとなった。

8 1954 年 12 月 2 日に調印された米華相互防衛条約(Sino-American Mutual Defense Treaty)は軍事的援助を中心に、政治・経済・社会等の協力も含んだ条約である。1979 年アメリカとの断交によって中止となり、代わりに台湾関係法(Taiwan Relations Act)が制定された。

9 リービ英雄『星条旗の聞こえない部屋』は「星条旗の聞こえない部屋」(『群像』1987 年 3 月号)、続篇と言える「ノベンバー」(『群像』1989 年 10 月号、原題「新世界へ」)、「仲間」(『群像』1991 年 11 月号)を併録して、1992 年に第一小説集として講談社より刊行された。本稿で扱うのは講談社文芸文庫によって 2004 年に発行されたものである。

10 「北京越境記」(『現代』1993 年 12 月号と '94 年 1 月号、『天安門』(講談社、1996 年)に収録)、71 頁。これはノンフィクションで、その内容は作者の実体験に基づいたものと考えられる。

11 リービ英雄「久しぶりの北京語」『アイデンティティーズ』(講談社、1997 年)、75 頁。

12 本省人と台湾語に関しては、リービ英雄の『我的日本語』(筑摩選書、2010 年)における「日本の植民地時代より以前から台湾に住む本省人と、四五年の統治終了や四九年の共産革命とともに大陸から渡ってきた中国人(外省人)がいて、複雑な社会的状況にあった」(127 頁)という説明に基づく。

13 ここで注意を払わなければならないのは、リービが記憶の再現や強調をする際、特定の語彙や短文に漢字の傍らに三つの方法で振り仮名をつけていることである。一つめは、幼少時に耳に入った英語に対するカタカナでの表記。例えば、国民党(nationalist:ナショナリスト)、共産党(communist:コミュニスト)、外交官(diplomat:デイプロマツト)等である。二つめは、聞き慣れた北京語の発音での表記。日本人(rì běn rén:ルーベンレン)、美国人(měi uó rén:メイグオレン=アメリカ人)の単語、及び一杯花茶(yī bēi huā chá:イーベイファチャ)、他不明白(tā bú míng bái:タブミングパイ=かれにはわからないだろう)等である。三つめは、リービの小説のなかに唯一現れる台湾語の発音での表記。外国人(guā-kok-lâng:ワゴーラン)と美国人(bí-kok-lâng:ビーゴーラン)等である。

14 リービ英雄「台湾の家」『新宿の万葉集』（朝日新聞社、1996 年）、93-94 頁。
15 リービ英雄「イーリャ・フォルモーザ―四十三年ぶりの台湾」『越境の声』（岩波書店、2007 年）、241 頁。
16 シャマン・ラポガン、詹澈、リービ英雄、茅野裕城子「座談　台東での対話―言語の問題をめぐって」『すばる』2006 年 4 月号「特集　日台作家キャラバン」、147 頁。